

おなつ 清重郎 五十年忌歌念佛

近松門左衛門作

上之卷

通ひ車は云々 古今集の暎の囀の羽撞云々の歌をかへて深草少將と小野小町の話にしたり (歌論義) 閨の扇 謡曲班女にあり 形見云々 謡曲松風にあり 柏木云々 源氏若菜にあり さんる 山路にて前に出づ 寄櫃 木材を組寄せて戸障子の周囲のわくにしたるもの、但馬屋の家の構を云

序詞 通ひ車は、小町が仇の情に乗せられ、閨の扇は、班女が親骨にせかれ、形身の烏帽子は、行平の云かぶり、柏木の鞆、さんろが笛、古今其品かはれ共、皆これ戀路の寄せ櫃、根太も根強き門柱、其但馬屋の初色に、立つや浮名の濡草鞋、笠が能く似た菅笠の、雫積りて戀の淵、湧て流るゝ和泉の國、水間の里の佐治右衛門、畠作りのたがらすや、鶯が産だる高給取の、手代は主の代りをも、清重郎といふ子を持って、老の入まへ暮しよき、正月著物播磨瀧、延引ながら年頭に、娘はおしゆん嫁の名も、三人連の木賃宿。明日は出船の名残とて、道頓堀の芝居過、名所くは大坂の、娘子達に交りても、打てず押されず手入らずの、田舎生れのおほこにも、父の乗りたる便船の、しるしは如何に錨綱、手繰りついたぞ日は傾く、いざ急がんとちよこく走り、とは川口にぞ著にける。

初色ふいろも夏なつ笠かさが能よくく似にたらし  
笠かさが清十郎きよじゅうらうに似にた  
たがらし一ひと鳥とりの  
一種いっしゆ、髪かみは農夫のうふ  
の事こと  
高給たかぢ一ひと鷹たかにかけ  
鷹たかが鷹生たかをむの諺ことわざ  
をとる又清十郎きよじゅうらう  
にせよをかく  
三人さんにん一ひとおさんを  
かく  
打うてず一ひと負おけず  
劣おらず  
扱あけず一ひと仲な裁ざい  
いくはなか一ひと幾  
箇所いか  
十文じゅうもん一ひと辻君つじきみの價ね  
九文半くわんぱん云々い十  
文じゅうもんの中華文ちゅうわぶんも負  
けてはならぬ

親佐治右衛門おやさちうゑもん苦打くち上ありて、「やああこりやく、此處こゝじやく。はれやれく大膽だいたんな、暮くれる迄まで大坂おさかの町まちをふらくと、女おんなの身みにて何事なにごとぞ。昨夜ゆうべも東ひがしの横堀よこぼりで、男おとこと女子おんなこと喧嘩けんかして、濱納屋はまなやの下したで組くんづ轉ころんづして居ゐたを、いくはなか見て來きた。扱あひになりしやら、錢ぜにをついたも慥たしかに見みた。大坂おさかの喧嘩けんかは大方おほかたきは極きはつて、十文じゅうもんでは事ことが濟すむ。喧嘩けんかは降物ふりもの、和御寮わごりやう達たち若もしもの事ことがあつたり共ども、いかなく九文半くもんぱん文ぶんでも勘忍かんにんはしめさるなと、眞顔まがほにいひしも殊勝しゆしやうなり。二人ふたりの娘打むすめうち笑わらひ、「さればいの、今日けふも一日いちにち芝居しば見て、それから此處こゝの川口かがの八景はつけいとやら見物けんぶつして、つい今いまになりし」とて、船ふねに乗のれば佐治右衛門さちうゑもん、草履菅笠ぞうりすひがき片付かたづけて、「まづく休やすめや」といふ處ところへ、向むかふの船ふねの船頭せんとう來きり、「和泉いづみの國くにの佐治右衛門さちうゑもん殿だんは此船このふねにか。此方こゝちの船ふねの乗手衆のりてしゆが、ちとお目に懸かり度たい。播州はんしゅう姫路ひめぢ但馬屋たじまやの勘十郎かんじゅうらうといへば、合點がてんじやけな」とぞ申まける。佐治右衛門さちうゑもん聞きも敢あへず、「ヲ、知したく、但馬屋たじまや勘十郎かんじゅうらう殿だん、わしが子息むすこの傍輩衆はうはいしゆ、參まゐつてお目めにかまりませう」と、上あらんとする處ところに、是こゝへ見みえしと勘十郎かんじゅうらう、「何んなにとく親仁殿おやぢごの、さても年としも寄よらぬは。不思議ふしぎな處ところで逢あひました。先御無事まごんごにて一段いちだん。清十郎きよじゅうらうも息才そくさいで、商あひの用事もちがひにて此處こゝへ上のりしが、はや下くだつたも存ぞんぜず。旦那だんなも折々せり噂うわさなり、何故なぜに見みへぬ」といひければ、篤あつい勘十郎かんじゅうらう殿だん様さまお久ひさしう御

何じや、何ぢや、何ぢやとて  
やがぢやとて

木の空一礎柱に  
上げらる、其柱  
の形十字に似た  
ればらよ

坐ります。嫁子共が申にも、親仁ちと旦那様へ往つしやれ。何かのお禮も申さつしやれと申ます。テ、くとは申ながら、正眞の貧乏隙なし。物作りの事なれば、いや大根時の綿時の、瓜を蒔くは茄子を作るは、牛蒡畠豆畠粟よ黍よ藍時よ、麥を蒔くぞ赤らむぞ、田を植へては草を取る、穂が出れば刈まする、粃になれば磨まする、米になれば炊まする、飯になれば食まする。何んじやし、徒居る間とてなく、御無沙汰」とこそ語りけれ。勘十郎打首肯き、「尤々、何方も隙はなし。して此船に乗つ何方への下りぞ」といへば、兼先旦那へ春の御禮も申、清十郎にも逢んと存じ、これは妹お俊、彼は行くく清重郎が留守をもさせんと存じ、おさんと申娘分、連て姫路へ罷下る。逆の事に御同道致さん」と云ければ、鷲イヤコレ逢ひたいといふは其事よ。先下る事は入らぬもの。清十郎が沙汰を聞かれぬか、扱々氣毒笑止な事。旦那の娘お夏様と密通して、お夏様のお腹は茶壺を抱た様になる。それに立野の一門中へ祝言が極つて、嫁入道具も出来揃へ、身共が道具を請取て、下り次第の嫁入。彼の腹の土産物、聲から詮義があるは定。否でも應でも清十郎は、片假名の木の空で此様に手を廣げ、引張風は知れた事。親兄弟も同罪なり。どふぞ嫁入の無い先に、身を引思案がさせたさに、知らせまする」とおどしけ

る。親は在所の律義者、何の工の有共知らず、「ア、お前は如來様。内々如何やら承り、氣遣いたせし折柄なり。傍輩のよしみとて御知せ有難し。年六十に餘つて、火屋へ片足踏込んで、一人の悴が木の空で、引張尻になるのが、そもや見て居られふか。悴が命助かる様に、御思案頼み奉る。さりとては、誰に似て下心の悪い悴め、と何處で聞てかいふこと」と、泣いて口説くぞ哀れなる。時に船場に案内して、「姫路の本町但馬屋の勘十郎様のお船は是か。難波橋の蒔繪屋誂へのお道具、今宵船に積んと存じ、銀子請取申さん爲、参りたり」とぞいひ入ける。勘あれ親仁聞てか。銀を渡せば道具が下る。道具

請取た一引受け  
ありさま一も前  
様

が下れば嫁入が有、嫁入があれば清十郎は引張尻。何んと此處が談合、身は國へ歸つて旦那へは道具屋が出来さぬ分で濟し置く。彼の道具屋の手前は親仁から、百五十兩か八貫目渡してさへ置たれば、波風立ず嫁入が延る。延さへすれば清十郎、隙を取らふと走らふと、此勘十郎請取た。此處は親仁太儀ながら、八貫目何んぞいの、田地賣ても子の爲じや、出したがよい」と、いひも果ぬに佐治右衛門、ぎよつとして、「エ、あり様は一口に八貫目、たとへ清十郎引張尻にならふが、鹽鮭にならふが、世が泥の海に成とても一文も銀は無い。エ、此方は皮か身か合點が往かぬ」と顔掣め、立て入るを引留め、勘そ

構ひ—故障

土ほぜり—土なぶり  
切羽脛金—せつば詰る事を洒落ていふ

廻し者—問諜を禪の事と聞く

いふにこそ一言ひはせぬ

れは親仁廻氣な。然らば銀も入らぬ思案が有、彼の蒔繪屋に向ふて、此娘には構ひあつて嫁入はさせぬ、道具は其方へ預けた。銀渡したら損で有ふ、と一言いへば濟むじやが、成まいか」といひければ、驚ハテ金さへいらぬ事ならば、我子の爲じや申さいでは」と、表の間にぞ出にける。雫播磨の姫路但馬屋の嫁入道具を、請取た蒔繪屋は此方か。身共は和泉のどん百姓、土ほぜりでおじやれ共、但馬屋のお夏には、此方に先の構ひが有。外の男を持せぬからは、嫁入道具を押へた。勘十郎殿先刻にから切羽脛金する通金渡したら御損であらふ。ことはつて置たぞ」と苦りきつてぞ申ける。蒔繪師の手代冷笑ひ、「ハテサテ悪い工面ななされ様、是娘に構ひ有ならば、それは先との詰開き、此方に構はぬ事。如何でも是は廻し者、近比悪い仕方」といへば、佐、ヤア何んじやまはし者ヲ、男じや物まはしをせいで能い物か。若い時は小栢撲の一番も捻つたおれじや。男に用ふ詞が有、まはしかいたかかよぬか、來い見せふ」と裾からけ、胸を叩いてりきみける。蒔繪師も聞ぬもの、片肌脱けば二人の娘、船頭船方おり合せ、「先堪忍」と取付ける。勘十郎も分け入て、様々宥め押沈め、「塗師屋殿も悪い合點、道具は其方の銀は此方の、銀遣らずに此方へ請取らふといふにこそ。其方と我とに彼の仁から一筆取て置なら

一左右一普信  
(偶言集覽)  
時宜一挨拶

ば、我も旦那の手前が立、其方も下細工へ手問遣らひでも大事なし。身に任せて黙つて居や。是親仁、何んと一筆召されふか」篤ハテお前の御了筋ならば如何なり共。それおさん、お望み次第に書きや」といへば、勘十郎立寄て、又画但馬屋のお夏祝言に付、構ひ是有により、嫁入道具押留め申所件の如し。但馬屋勘十郎殿、蒔繪師權之丞殿、清十郎親佐治右衛門」と、好む通りに書ければ、親は悦び巾著明け、墨肉墨々と捺したりし、因果の程ぞ不便成。一札巻て勘十郎、懷中にしつかと收め「サア埒は明た塗師屋殿、萬事は國より一左右せん。先お歸り」といひければ、塗師屋は船中一禮し、時宜をのべてぞ歸りける。尊なふ親仁殿、此勘十郎が能い時に居合せて此方親子の仕合。道具さへ下らねば祝言は延引、其中には清十郎、隙を取らふが走らふが、氣遣ひな事はなし、勘十郎に任されよ。此船今宵出ると聞、然らば是に」と乗移り、「方々此度下つては、清十郎が爲にも悪し。能い時分に便せん、其時必待入ぞや。數年馴染の清十郎、悪い様には致すまじ。何れもさらば」といひければ、親子の者は船より上り、手を合せ涙を流して、篤傍輩のよしみとて、有難し忝し。生の親の我等より、清十郎奴が命の親、嫁も娘もやれ拜め。辨へもなき清十郎、弟共下人共思召て御異見なされ、美しくお暇取、再び在

佐次一匙をいひ  
かく  
煎じ一事の迫る  
藥の縁に用ふ

有銀箱云々一  
百兩箱十で千兩夫  
を六十で六萬兩  
の財産と父の年  
とかく  
算盤に三々父  
の窓深を云ふ、  
かけると斯ると  
掛く  
屋の内一八疋に  
かく、罽は幅に  
同じ  
綾子もぎく  
にかく  
しげる一男女ま  
めやかに物語る  
(俚言葉)

所へ來る様に、偏に頼み奉る」と、敵と知らぬ愚さの、親の情は子の爲に、藥といへど  
是は又、毒を調合する佐治左衛門、心は律義一ぱいに、煎じ詰たる水間の里、船は別れ  
て三重下りけれ。

## 中之卷

所さへ、戀知り顔に姫路とは、何時名付しぞ但馬屋の、お夏が父は九左衛門、國一番の  
米問屋、有銀箱を十づとに、六十近き月雪や、花も紅葉も算盤に、かよる親には似ぬ娘  
お夏は深き濡れ故に、菩提心と意地張て、嫁入も丈も延々の、それも戀する氣の前か、  
二人の親の顔までも、飾磨のちちど播磨濕、國に浮名や立ぬらん。今日は蚊帳の祝義と  
て、萌黄の生絹六疋七疋、屋の内祝ひ賑へ共、お夏は更に氣に染まぬ、心の内の綾子の  
蚊屋、色香を外に漏さじと、夏ア、おれや風引いたそふな」とて、涕打かみて紛らかす、  
忍び涙ぞ道理なる。心を知らぬ腰本共、「お夏様と髻様と、此蚊屋でしけらしやんしたら  
ば、いかな藪蚊もけなりかる。此方は蚊屋は及びもない、せめて嫁入の紙帳なりと、あ  
やかり度い」と口々に、「申お夏様、新調蚊屋の御祝義、少浮きくとなされませ。賑か

つぶ〜くど  
くどと算盤のつ  
ぶ  
怖い一赤飯をこ  
は飯ともいへれ  
ば饑けたり

不落居な一かた  
のつかぬ

に酒盛して、謔ひませふ」といひければ、夏ア、何をさしくしやるぞい。蚊帳が出来よふが、紙帳が出来よふが、此氣合で今やなど、嫁入する氣は微塵もない。可惜手間で彼の蚊屋を、生絹の衣にして著たい。只無常氣でおかしうない」と、背後を見れば父親は、内手代の源十郎に、帳を讀せて算盤の、冬つぶくいやんな喧しい、先來て祝や」と赤飯の、怖い目付は我戀を、知てそふなと百千に、碎き破たる胸算は、いかな算者も及ばじな。斯る處へ清十郎、勘十郎同道してぞ戻りける。九左衛門悦び、「夏ア好い處へ戻つたは。今日はお夏が嫁入蚊屋の祝ひ。此拍子ならば、大坂の仕合もよかろ」といへば、清十郎庭に立ながら、「旦那の病になされた、中國北國残らず賣て、爲換手形濟ました。利合は高で貳拾四五貫目」と、目を合する二人が中、無事な顔見て嬉しいと心に心をいはせたり。九左衛門上機嫌、「お手柄く。お夏が嫁入は只出來た。扱なんと勘十郎、蒔繪道具も出來つらん。跡から來るか如何ぞ」といへば、勘お道具も出來致し、代銀残らず渡し、職人の手前は濟ながら、不落居な事にて、道具を留められ下りませぬ」と、云も果ぬに九左衛門立腹し、「それは如何じや。餘る程銀は遣る、但馬屋九左衛門が娘の嫁入道具止められふ覺へは無い。惣じて此祝言、お夏が氣色に日限延び、漸々此度



脇詰近一嫁に  
れに短袖を詰め  
て小き袖にする

ねすりごと一あ  
てこすり  
身の正直云々  
自分が正直なる  
より人もかくな  
らんと思ふ  
是に懲よ云々  
只是に懲りよと  
云ふ語

駿河一するにか  
富士山云々一懸  
隔の甚だしき壁  
一里塚は道一里  
毎に櫻を植ゑた  
り(雨窓閑話)

脇まで詰め、今日明日となつて、道具が出来ぬ何んのとて、此嫁入が延されよか。世間からは道具屋へ銀渡さぬと評判せん。それに浮々銀渡し、素手で戻るといふ様な、子共遣たも同前」と、算盤の割れる程、疊を叩いて吐りける。勘十郎迷惑そふに、「御立腹御尤、拙者も脱りは致しませぬ。證文をお目につけて、ひそかな處でお物語致し度い事御座る」といへば、九、十、いひわけあらばサア聞こふ。源十郎も来て聞け。勘十郎此方へ来い」と、打連れ裏の小座敷へ、苦い顔して入にけり。清十郎奥を見て、「ハア、餘所には嫁入が有そふな。此方や洗足でも致しませぬ。やあゑい」と沓脱に腰を懸れば、お夏つかく走出、「又ねすりことばつかり。同なじ口で可愛やといふ事がならぬか。意地の悪い」と抱付き、戀には涙脆いぞや。清十郎は懐手、「ア、思へばあほうな者、身の正直な勝手して、人の詞をまん誠に。世間の奉公する者は、態々隙を囉ふては、春は親に逢に行、此清十郎は親里の近所に、十日二十日逗留しても、親の所に嫁許の女房分が有故に、これに逢ふと思はれては、心中が立ぬと思ひ、親へ便りもせず歸る。是に懲よどうさい坊、眞に孫子に傳へても、主の娘と念比など駿河の富士と一里塚、及ばぬ事をエエあほうな」と、舌打してぞ頭掉る。お夏涙を押し拭ひ、「其方と我が身は實事にて、口舌

實事云々―眞面目な顔で口言いふ筈なし  
室―掃磨の室の澤の浙廊  
一季半季の者―奉公人

出来ぬ仕方―そんな大膽な事は出来ぬ筈と也  
右左云々―下着の右は振袖の姫姿左は詰袖の嫁姿と也片ちぐはちぐはぐ

などする挨拶か。此度の祝言を好きこのんだる事でもなし、知ての通り、母様は室の女郎、今の内の母様に彼の弟が出来る迄は、我も室で育ちし故、母方が悪いの、傾城の風が有のとて、何處の嫁にも嫌はると。これぞ能い事幸と、猶女郎の風を似せ、人は隠せど我は只、母様は傾城と、一季半季の者にまで、觸れ廻りたる村時雨、縁には付じと願ひしに、彼の立野の阿房面、數銀に目が眩て、嫁に取らふと嫌らしい。此お夏はつかりはいふた事を違へるか。恨みも辛みも後を見ていふたが能い。惣じて和方も斯様な時如何なされ斯様なされの主待遇が聞へぬ。わしから詞を直しませふ。なふ此方の人、此方向んせ」と、袖口から手を入れて、ほとく叩いて抱しむる。清十郎四邊を見廻し、「コレお前に聞へぬ事がある、此袖下は何事ぞ。若衆の前髪、女の脇詰、男が知らいで立つものか。出来ぬ仕方」といひければ、夏なふそこらを忘れるお夏でなし、ま一度振袖見せ度さに、皆々お針が縫ふたれど、祝ふて我も縫んとて、片袖計縫ふ顔して。是が嘘かと帯解て、上著を脱けば右左、振と詰とのかたちぐに、片枝は蕾み片枝は、開き初めたる花衣、二人前見る誰も皆、斯ぞ仕立て著せまほし。清十郎は身を擲ち手を合せ、眞涙がこぼれて忝し。それほどに此男を不便と思召さるよかや。冥加に盡ん勿體なや」と、

取付き拜めば手に縋り、眞女房を拜む事かいの。是程思ひ合ふた中、何故に女夫になられぬ」と、辛氣泣にぞ泣居たる。謂「ヤア申お夏様、いつぞやお前に借ました七十兩の小判の事、私が遣ふ金にてなし。傍輩の勘十郎、私商ひに損をして、平に頼むと申た故取替へやらんと存せしが、思ひも寄らぬ仕合して、損を埋しと道すがらの咄。最う要らぬ金子なれば、戻しませふ」といひければ、夏ア、好いはいの。婆々様の讓の金、如何しても大事な。人の來ぬ間に、彼の蚊屋の開眼をせまいか」と、怖々慄ふ春風も、人目を忍ぶ緞子の蚊屋、蚊屋はお夏に縁深く、神の結ぶの釣手か、と戯れかはす手枕も、心せはしき契りなり。内手代の源十郎、「お夏様、旦那の呼つしやる」と出けるが、はつと廣げし手も打れず、あきれて立てば清十郎、お夏が褌を引被く。お夏騒がず袖にて隠し、「是源十郎、其方も男じや、引せはせぬ。忍んで逢ふは清十郎、見遁しにして給らるか。沙汰をするなら爲るといや。幸刃物も此處に在、直に二人が死ぬるまで。サア助けてたもるか殺しやるか、急度した誓文で承らう」と、弱身を見せず責付けられて源十郎「沙汰して私徳もなし。商ひ冥利隠密なり。僞ならば各より私が先さきに、清十郎が脇指にて止めを刺るゝ法もあれ」と、云捨歸る其舌も引入れず、寄親の勘十郎に打明

螢の聲云々一箱  
に入りし螢聲の  
如く胸の思を包  
む

まぶる一交はり  
染む  
たまか細かに  
心を用ふる、公  
道は花やかなら  
ぬこと  
(俚言集覽)

あらがふ一譯ふ

て、斯くと語りし不齊さよ。二人は五體に冷汗の、露の命も消ゆるばかり、居直つて溜息を、つきも敢ぬに親手代、ばらくと走り出、お夏が小腕引出し、清十郎もはひ出れば、丸其儘居れ、身動させば男共、打ちのめらせ」と取廻せば、蚊帳の内にすごくくと、晝の螢の影消えて、籠に寝るゝ其風情。外にお夏は夏の蟬、聲の限りを泣盡し、思ひをくらぶる計なり。親は腹立ち涙にて、「やれ女郎奴、おのが母は流れの者、空言に身はまぶれても、心のたまかさ公道さ、千人にも稀なりしぞ。何時習ふて其いたづら。遊女の腹とて、何方へも嫁に嫌ふは聞つらん。其袖下は何事ぞ。左様な事をせんよりも、己れが額に傾城の娘と、何故看板は打をらぬ」と、齒切をしてぞ泣けるが、「やい丁稚奴、不義一通りは許しもあり、十一の年から子同然に育てし奴。事によらばお夏奴と夫婦にせまいものでもなし。在所の親奴と云合せ、嫁入道具に邪魔を入、親方に恥搔せ、但馬屋の家を覆そふと工んだな。口の明れぬ事見せむ」と、證文出し、「これ見たか。おのが請狀にある親奴が印判、妹とやら嫁とやらが文共合せて吟味した、芥子程も違ひなし。覺へがあらふあらがふな。主の寢首を搔かんも知らず。エ、憎や」と蚊帳越に、額を三ツ四ツ喰はせて、涙を翻して怒りける。清十郎はつと驚き、「親の印判、妹の手跡と

はいてに云々―  
新装の時に著て  
来た

無得心―思やり  
なき

はいひながら、親にさへ逢はぬ身が、夢程も覺へなし。在所の親を召寄せて吟味もなされず、片手打のなされ様。勘十郎奴何處に居る。いはせねば堪忍せぬ」と、蚊帳より出るをとつて押へ、丸ヤレ勘十郎源十郎は、此九左衛門が兩の眼の代りをする。其手代が穿鑿して一札取たに胡論があるか。暇をくれた出て失せふ。こりや女子共、男共、彼奴がはいでに著て失た布子があらふ。尋出し引剥で、著せ換へ追出せ」とぞ喚きける。お夏は斯る有様を目も當られず、涙にくれ、「いはど我身も遁れぬ科。あまりといへば親ながら、無得心なるお心や。人の譏りも思召し、少しは有免あれかし」と、聲を上てぞ泣居たる。丸ヲ、憐れいも辛いも知たれ共、をのれが母の遺言に、傾城の娘とて侮られふか淺ましや。未來の障りはこれのみ、と返すくも歎きしに、氣遣ひするな。能い婿取て名を揚させふと請合しを、嬉しそふに打笑ひ、それで成佛くくとて、死んだ良ばせ忘れかね、千兩附ける嫁入を止め、大事の娘を教唆し、惑者になしたる恨み、但馬屋の九左衛門は、胴慾者慘い者といはれねば、亡人の位牌に向ふて云譯ない。胴慾者には誰がなせし」と、わつと計に堪へがね、咽せ返りてぞ歎かるよ。其間に下部共、衣裳を剥で振袖の、汚れし綿衣に著せ換ゆれば、さしも美形の清十郎、山田の案山子とうそ顛ひ、二

奪衣婆—頭河  
曲有奪衣婆脱  
亡人衣(十王經)  
提物差換—印籠  
刀など

相讀—相極

目とは見られぬ容貌。お夏は「我も一所にと、飛付を下女腰本、引分け宥め教訓し、常の部屋にぞ伴ひける。父は彌々腹を立、「勘十郎は何處に有、何に恐れて引込むぞ。清十郎奴が入れ物吟味し、衣類諸道具押へ置、追出せ」といひ付奥に入れば、「心得ました」と勘十郎、半櫃、箆筒昇出させ、ぐはらりと打明て、衣類引出し取散らすは、三塗川の奪衣婆の、呵責も斯やと哀れなり、錠前を叩き破り、提物差換取出せば包みの小判七拾兩、勤、これは扱、此金子はお夏様へ婆々御よりの譲りの金、身が包ませて覺へ有、極つた大盗人、首のは有旦那の慈悲。叩き出して追拂へ」と、手足を取て引出す。清十郎大聲上げ、「ヤイ勘十郎、盗人する男でなし。をのれが私商に赤穂鹽買ふて損をして、首縊らねばならぬ首尾、どふぞと談合したる故、お夏様へ申ておのれに貸す爲預つた。戀する者の因果で傍輩の機嫌取、追従したが身の仇となつたるか、口惜や。をのれが損は入れ合せ、今は銀も要らぬといふ、察するに此度の嫁入道具の代銀を、遣らずに己れが引込んで、我親かたつて一札させ、人を損ふ工面とは、鏡にかけて知たれ共、相讀なければ是非もなし。是を見よ、清十郎は破れ布子一枚で、非人の體にはなつたれ共、心の内は紗綾縮緬、錦より潔い。エ、辛いぞや、やれ恨めしい」と、齒嚙をなし

涅槃の雪―謎に  
雪の果は涅槃と  
あれば門の雪を  
も見納めと也、  
涅槃は陰曆二月  
十五日

愛染―明王の一  
にて愛慾を司る

て泣きけるが、「旦那にさらく恨みはなし。十一歳の彌生の花、いろはともちりぬるとも知らぬ者の、是程迄算勘商賣、讀書の、硯の海より山よりも優つたる御高恩、拳一ツあたらぬ身が、いか成月日か、今日の今日主従の縁切るよ。いか成神の咎めぞや。今一度旦那の顔拜まん」と駈入るを、情なくも男共、手取足取大道へ追出し、門口はたと鎖しけるは、詮方もなき三重次第なり。未だ二月の朧夜や、涅槃の雪の名残の門、立留りつ立去りつ、凍へ狼狽へ佇立めり。無慙やお夏は魂も、布子の袖に入計、身は脱がらの力も切れ、若やと部屋を忍出、門の戸明てそつと出、四邊を見れば人影の、遣お夏様か「夏此處にか」と、いふより先に抱合ひ、聲を立てじと諸共に、肩の縫目に喰付て、忍び音に泣く計なり。夏今の間の物思ひ、ま一度逢せ下され、と幾千の願を掛たやら。清十郎の清の字なれば、先此處の清水様、京の清水、室の明神、書寫山、伊勢の御神様、住吉様、金比羅様、不動、愛染、大師様、拜み頼みし印にて、顔を見て有難や、サア二人連にて立退て、いか成遠國小借屋でも、二人使ふを一人使ひ、一人使ふを手鍋でも、暮されまいものでもなし。いざ立退かん」と有ければ、眞いやそれでは、情の親方の憎しみも増るべし。在所へ歸り、親共と勘十郎奴が善悪糺し、身の垢ぬいて詫言せば、御

機嫌も直るべし。それまで辛抱遊せ」と、泣くく有め慰むれば、互戀し床しは身の氣隨。男の爲には憂苦勞、厭はずながら只一人、突放して遣れふか。これ此小袖と脱換て、其布子を逢ふまでの形身に著んと、涙ながら互に帯解き身を合せ、片袖づよを脱交はす、肌睦しき心ざし、戀路ならずは何故に、生れて知らぬ木綿物、服紗の衣と引締て、顔と顔を見合せて、わつと泣入る心底に、萬の涙籠るべし。物にて顔を押包み、「さらばや」といふ所へ、腰本下女共、「お夏様御座らぬ、裏よ井戸よ」とひそめきしが、門口明て「こりや此處にじや。ア、申お夏様、お前は悪い合點な。どちらの爲にもならぬ事、先づ御入」と、衣裳をしるしに清十郎を取巻き、連て内に入けるに、お夏續いて入らんとす。下女是清十郎殿、お夏様がいとしくば、先往んだが好いはいの。男の様にもない人じや」と、恥しめ突出し押出し、大戸をはたと鎖ければ、清十郎は詮方なく、部屋へ入體にして、大釜明て身を縮め、そりりと忍び入り、中より蓋をぞしめにける。お夏は門に憧れて、入るべき便を待つ所に、炊婦の玉はそろくと、門口明て、「なふ清十郎様清様」と、お夏が袖をしかと取、玉ア、此方は戀知らず。私が此方に絆されて、御主様を袖になし、朝晩に心を付け、しんぞ思ひを盡せども、お夏様に心中立て、一度

御主様云々主  
人の命令を蔑に  
す





ない。お蔭で萬事忝いと、いへば源十郎、「一段く。それに付き、清十郎奴が諸道具、七拾兩の小判まで、旦那が身共に預けられた。お夏女郎と清十郎奴が、盗出した分にして、仕てやる様な工面がなと、分別すれど能はぬ智恵。其方が今度のおぞい仕様、魔法でも適ふまい。どふぞ思案はあるまいか」といへば、勘十郎頷て、「嫁入道具の代銀を、此方へ遣ふて損を埋め、まんまと間には合せしが、一度は大坂へ上す銀、あれを胸に當て居る、工面を聞け」と叫き合て吸付る、烟管の先にて行燈は、消て闇とぞ成にける。清十郎は幸と、釜の内よりはひ出る。酒に酔たる源十郎、とろく寝入る躰

なれば、勘十郎揺り起し、鼻に手を當て、仕濟したり、七十兩を盗み取、預り手の此奴に負ぼせん物と分別し、そつと起出、源十郎を我寢處に押遣て、夜著打被せさし足し、奥の納戸に入にけり。清十郎はそれとも知らず、扱は彼奴等は寢入しな、エ、憎さも憎し、とても斯なる憂身なり。身代の敵、此首尾に助けておめくと戻られず、勘十郎奴を刺殺し、有甲斐もなき我命、仕損ふたら浮世は闇、後前見へぬ出來心、内の勝手は覺えの庖丁、心の錆も荒砥の研立、尋ね寄れば高野、前後も知らず不思議の本望、夜著引退けて咽笛を、ぐつと剋れば源十郎、呷といふを引起し、膽先を一刀、又刺通して息を留め、

身代の敵—主家  
の身代の敵  
心の錆も云々—  
精神は潔白なる

願骨一口  
鳩尾一みづもち

よしこれも云々  
—ま、よこれも  
故が非より出で  
たりと也

引入—手引した  
事件間

耳に口を差寄て、「漣」こりや勘十郎、未だ魂はよも去るまじい、能く聞け。傍輩に科を被せ、身の爲にせし報ひの劔、名乗合て殺さぬは、近比残念至極ながら、讒訴したる此願骨」と、願かけて斬下け、「此胸から工んだか」と、鳩尾前を背中まで、思ふ様に止めを刺し、死骸を夜著に押包み、立上れば血落て、滑つて反向にどうと臥す。はつと起て藩團にて、足摺拭ひ静々と、身仕廻して立たる處に、奥よりお夏は手燭の影、表へ出るを、漣これくくく「夏ム、其處にか」と走寄り、血に滑つて「ア、怖」と、聲を立てるを押鎮め、様子を呷き、此上は一所に退かん」といふ處へ、行燈提て勘十郎、納戸の方より來る躰、南無三寶人違へ、よしこれもうぬが身の、火を吹消して車戸を、押し明け飛んで出にけり。遅れてお夏は詮方なく、蚊帳打あけ身を潜め、生たる心地はなかりけり。此音に勘十郎走寄て手燭を上げ、夜著引捲て、「ヤア源十郎が切られたは」と、呼はる聲に主下人、男女残らず起合せ、半疑ひもなき清十郎、門の戸明たは落つらん。引入れあるか吟味せよ」と、上を下へと返せしが、下人なふお夏様は御座らぬは。ヤア是ぞ曲者探して見よ」と、二階、内庫、縁の下、湯殿まで探せども、蚊帳の内は氣もつかず、表の口に錠下し、甲裏を探さん」と乙尤」と、提灯燈して斷惑ふ。お夏は我身の恐る

因果の綱云々  
不幸の綱に懸る  
に斯るを掛く  
直なる法云々  
正しき道には従  
はれず横道行く  
契りにし西に  
かく  
狂風云々  
お夏  
は發狂したり  
爲ると鳴るとか  
妻一夫の事  
夜の鶴一鶴は子  
を愛する爲夜寢  
ずに守る

しき、清十郎が氣遣ひさ、氣も逆立て散亂し、「南無天照太神様、觀音様氏神様、死ぬとも二人一所に」と、胸を騒がす折からに、勘十郎が聲として、「蚊屋の内を見なんだ、探して見よ」といふ聲す。夏、南無三寶」と飛んで出、表には錠下りたり、裏には大勢充滿たり、跡へも先へも因果の綱の、かよる髮身は佛神の、直なる法も横町の、相の細路次蹴破れば、さつと開くも戀路の念力、かけし願ひの神力の、神變奇特毒蛇の口、遁れ出たる如くにて、落んと契りにしの辻、東の辻に、夏なふ我良人」と、聲を限りに往還り、「扱は俘となりけるか」と、はや狂亂となる鐘の響の末に、夏あれお夏くと呼ぶはいの。おふく其處にか。何處にぞ。いやくいや待て暫し、あれは我屋に父の聲、我を尋ねて我を呼ぶ。親も床しや、妻も戀しや。父は子を呼ぶ夜の鶴、我は妻呼ぶ野邊の雉子、追かけ行かん、夜は何時ぞ。鐘はいくつ、八ツか、七ツか」曉風の、辻行燈を吹消して、道も心も眞くらく、くるくくく、狂ひ亂れ泣亂れ、亂れて歌ふ鶏の、卵を渡る危さの、狂女となるこそ、三皿哀れなれ。

お夏笠物狂

下之卷

少くはん一唄ふ  
時の拍子なり  
歌念佛一比丘尼  
が門を磨き頭を  
子細に包みて歌  
ひしく唄にて骨  
髄集に詳し  
流れ、河竹一遊  
女をさす  
びんごころ一小板を多繋ぎて  
比丘尼、鳴すも  
の花の手一篋手  
笑顔一柄にかく  
しは一鹽にかり  
て髪燐をいふ  
向ひ通る一當時  
の流行歌  
鐘に待宵一待宵  
伴徒の歌をとれ  
り  
肥魚一孔子の子  
れて父に先ちて  
歿す  
白居易云「白  
氏が女子金鑿子  
を哭する文をと

夜さ來ひといふ字を金紗で縫せ、裾に清十郎と寝たところ、裾に清十郎と寝たところエ、  
少くはん。歌念佛「観ずれば夢の世や。寝て温めし懐子、何時の間にかは浮れ初、三界を  
只家として、袖笠雨の宿りにも、心とどめぬ假枕、流れにあらぬ河竹の、笹の小笹のびん  
ざよら、花の手おほひお手を引れた、是も熊野の修行かや。姉様のこれの、勸進柄杓の、  
笑顔好しとて柳が招く、柳の髪を何故に、浮世恨みて尼が崎、尼が崎とは海近く何故に  
其方はしほが無い」節は哀れに身は伊達に、歌は念佛の歌比丘尼。歌向ひ通るは清十郎  
じやないか。笠がよく似た菅笠が、能く似た笠が、笠が能く似た菅笠がゑ」笠を知るべ  
の物狂ひ、物に狂ふも我計かは、鐘に待宵鳥には別れ、戀する人の夜なくを、氣違と  
てな笑ひ給ひそ。講傳へ聞、孔子は鯉魚に別れ、思ひの火をば胸に焚き、白居易は又我  
子を先立て、枕に残る藥恨むは斷や。夫は子故の別れの涙、親より子より我身より、い  
とし殿御のいとしほや。夫より便宜音信の、聲も聞ねば顔も見ず、我は秋鹿夫を戀、歌か  
いろと啼と知らせたや。なふくあれなる御僧我殿御返してたべ。何國へ連て行事ぞ、  
男返してたべなふ。いや御僧とは空目かや、我も焦るよ丸太船、浮世渡る一節を、諺へ  
や諺へ泡沫の、二人歌、小舟作りてお夏を乗せて、花の清十郎に櫂を押さしよる」  
觀音薩

れり(白氏文集) かいろ一偕老に かく、藏玉集 武藏野にかいよと、し鳴く頃は 尻花津寄る秋の 夕暮とあるを音 便にてかいりと 云り 燕居雜話 九太船一比丘尼 をかく 枯れたる木一 念、後観音力枯 木華更開(陀羅 尼經) 笠にさいたる一 熊野道者の歌

榧の誓には、枯たる木にも花笠、笠に挿いたは椰の葉、腰に挿いたも椰の葉、一枝二枝、  
 三日に三枚七日に七枚、起證誓紙の牛王のうらなく、灰に焼つゝ互に飲んだる、水も漏  
 さぬ中々に、引も合せぬ神心、熊野の神のお留守かや。足柄、箱根、玉津島、貴船や三  
 輪の明神も、神共覺へぬ神ならば、尋る人に逢せて見や。それく逢せず逢せぬは、皆  
 偽りの御神と、譏つても祈つても、神の力もかなはぬか」と、笠も髻も搔投捨、狂ひ歎  
 くぞ哀れなる。共に濡らせる尼衣、二人の比丘尼も涙を押へ、「我も尋る人故に、假に扮  
 せし修行の道、思ひあたる事あらば、知らせ申さん國處、有様語り給へとよ」罵嬉し  
 の人の間言や。國は播州姫路の者、尋る夫の容姿、姿は詞に語る共、心は筆も及びなき、  
 ほんじやりとしてきつとして、花橘の袖の香に、昔男の業平作り、黒い羽織が好  
 き梳油、鬢付鬢付眞黒々、黒目がち成目の中に、鼻筋通つて櫻色、年ごろは甘あまり、  
 せい高からす低からず。茶の湯、盤上、打囃し、男の藝の一つでも、疵なき玉の盃の、  
 酒も美しい酒、假名文書手の萩の露、轉寢し、脱敷夜の睦言は、おれと和女が中ならで、岸  
 の濱松根堀れても、漏すまいぞや顯はすな、變るまじきと末かけし、末の松山浦の波、  
 上越す人もなかりしに、友傍輩の猜みにて、犯さぬ罪の仇名をかこち、世を憂きものに

美しい酒一癖のな  
 い酒呑  
 根堀れ一根間ひ  
 菰問ひせられて  
 も  
 末の松山一君を

あきてあだし心を云々の古歌より契り深きをいふ上越す云々―清の右に出づる者なし  
何か云々―其甲斐なしにも夏をかけ諸間班女の狂氣を寄せたり  
由縁の草葉―由縁の中

羽撞締―高手小手にくしあげ

出給ふ。今は我名を包みても、何か其甲斐夏果る、扇の女の物狂ひ、其人の名は清十郎あり、姿は變る共、未だ佛は残るべし。教へてたべの人々」とて、伏沈みてぞ泣居たる。二人の比丘尼總付一扱こそは餘所ならぬ、一ツ流れの和泉の國、其人の爲にこそ「まゆん」我は妹「さん」我は嫁「二人」親の歎きを宥めかね、共に亂るゝ我身ぞや。狂女といふも何故ぞ。和女は妹脊の忍草、身は兄弟を思ひ草、同じ由縁の草葉ぞ」と、手に手を取て泣叫ぶ、物の哀れをとどめける。比丘なふ淺ましや、今里人の語りしは、但馬屋の清十郎は人を殺めし科によつて、方々へ追手かより、長崎とやらんにて終に捕はれ、囚人と成、彼の松蔭の竹垣にて七日曝し、其後は但馬屋の門口に、獄門にかけらるゝと語りし故、せめて餘所目の暇請に是迄は参りしが、御存じなきかいとほしや」夏に我良人は捕れて、終に首を切らるゝとや、それは誠か。今迄は狂氣の中にも若もやと、頼む念力切れ果て、同じ刀に切られん」と、駈出るを二人の尼、「歎きはかはらぬ我々なれど、最期に心亂れては、人の護後世の爲、皆其人の仇ぞ」とて、泣くゝ制し留むれば、はや先拂ひの警固の者、山賊夜盗の其如く、厳しく堅め引出す。生ての思ひ死する罪、もと一筋の縛めの、繩目に遭ひて清十郎、引れ出るぞ無慙なる。矢拂の内に土壇を構へ、高手を許し羽

る事だけを容赦して左右の二の腕を縛す

搔縮、北向に引据ゆるは、目も當られぬ風情なり。お夏は涙に目も明れず、聲も立ねど伸上り、耳なふ此處に居る。是此處に顔を向て下され」と、呼はる聲も往來の、群集の歎き念佛に、紛れ聞へぬ哀れやな。不便やな清十郎、顔も容も瘦衰へ、最期極る心にも、後生菩提も思はれず、お夏が歎き古郷の、親兄弟は如何ぞや。お夏に知らせ今一日、せめて面影計でも、姫路の方を見廻して、目と目をふつと見合て、お夏は「わつ」と泣出す。清十郎は聲立てず、膽より出る憂涙、刀の刃より先さきに、思ひに命絶へぬ可し。涙を中の架橋と、心通はす心の色、世に取沙汰の諺や。歌清十郎殺さばお夏も殺せ。生て思ひをさしよよりも、思ひを生て、生て思ひをさしよよりもエ」なまみだく、南無阿彌陀、南無彌阿陀佛なまみだく、南無阿彌陀佛と回向して、皆々袖をぞ絞りける。清十郎涙を押へ、「何れも有難き御回向、千金萬金より、一遍の回向に優る寶なしと承る。最期の悦び何事か是に如ん。さりながら、心にかよるは此高札、主人の金七十兩、盗むとは身に取て覺へなし。相手勘十郎を切殺さんと思ひしに、過つて人違へ、遁るよも業悦びならず、殺さるよも業歎きにあらず。某生年廿五歳、十一歳の春より奉公し、主人の養育み情にて、商人の道一通り、藝能文字の本末迄、人竝に成たるも、皆はお主の



高き山云々成  
佛の難きに喩ふ

只一人も夏

御のち主一丸左  
衛門

御高恩、明暮主の教へに任せ、親に孝行、主に忠、只正直を守つて一言も偽りをいふま  
とじ、每朝天道氏神を祈りしかども、若き者の悲しさは、只今非業に死んとは思ひも寄  
らず、佛共法共一遍の念佛申せし事もなく今の、口惜しさ詮方なく、高き山の頂にて。  
一杯の水をもとむるが如しとは、此身の上に知られたり。此群集の中にこそ、清十郎が  
一命かはらんと歎く人も有べきぞ。必々僻事なり。存生へて追善し、菩提を弔ふ善根  
こそ、命を助け、不老不死の藥を興ふるよりも嬉しきぞや。人々の回向を受け、佛の御  
國に至らんと、思へばく、此世の羈絆はふつと思ひ切たぞや。ア、思ひ切ても切ら  
れぬは、いとし可愛の只一人、よしこれも夢の戯れ、頓生菩提、南無阿彌陀佛」と、潔  
くはいひけれ共、お夏が歎き妹の、變れる顔を尻目につけ、覺えずわつと泣出せば、お  
夏を始め二人の尼、警固の上下、縁もなき、貴賤群集に至る迄、皆々袖をぞ絞りける。  
やとあつて清十郎、「如何に警固の方々、口乾きて苦しきに、烟草一服所望したし。此群  
集の其中に、姫路の人も有ならば、吸付て給はれかし。情のお主の御手より、末期の水  
と觀念せん。如何あらん」といひければ、誓苦しからじ、それく」と、烟管烟草を出  
しける。お夏悦び「なふ我こそ姫路の者、一樹の蔭も他生の縁、况して一ツ國なれば、

充其願一孟蘭盆經にある句にて其願を充たして清涼池の如くならしむ  
 沙羅云々一釋尊涅槃を示し玉へる所、其時栴檀の匂の煙が今烟草の烟に變りしと也  
 梵釋二天一梵天、帝釋天  
 りやうぜん一鹽山、鷲の山に同じ、此山凡夫が見れば荆棘瓦礫の山なれども、佛菩薩が見れば百寶莊嚴の淨土なり

未來も一ツに生ると爲、約束の烟りぞ」と、餘所ながら暇請、烟草吸付垣越に、警固の者取次で、清十郎にぞ渡しける。夫婦は物も云たけに、顔振上しが咽返る。涙を中の關の戸にて、とかふの詞も出ばこそ、泣より外の事はなし。漸涙を押留め、鬪人も多きに御身の手より、末期の衣服を受る事の有難さよ、本望さよ。此烟草にて十惡五逆の睡を覺し、充滿其願如清涼池と嘯きて、地獄、餓鬼、畜生、修羅、此四惡種の苦患を解脱し、吹出す烟は沙羅林栴檀の霞と變じ、三寶供養の燒香となつて、三十三天に薰じ渡らば、日月は兩の眼に入代り給ひ、梵釋二天に手を引れ奉り、佛の御前に此度は、立別るる共藻汐燒く、烟は同じ鷲の山、りやうぜん淨土で待べきぞや。南無阿彌陀佛」といふより早く、烟管押取雁首迄、咽の内へ押込んで、眞逆様にぞ伏たりける。警固の上下ふためきて、「それ殺すな」と引起せば、色もかはつて目眩めき、血は紅の瀧津瀬と、口に流るよ風情を見て、夏口惜ふ後れたり。我こそ清十郎が二世の妻但馬屋のお夏、人々の情には同じ土に埋みてたべ。南無大悲觀世音助け給へ」と、立たる拔身の鎧押取、咽笛ぐつと突通す。二人の比丘尼抱付、「なふ皆様頼みます」と、泣けど叫べど囚人の、自害に各々仰天して、勞る人もなかりしは、是非にかなはぬ次第なり。城下に斯と注進す。

敗せり  
しなしたり—失

代官所の役人、馬を飛して駈來り、矢拂の内に飛で入、大聲上て、「ヤア早まつたり清十郎、汝傍輩の源十郎を、人違にて殺めし段は、白狀紛れなしといへども、盗人の科未だ分明ならぬゆへ、さらし者となして成敗の日を延し、盗人の本人顯はれなば、汝が命を助けんとの評議なりしに、近比残念千萬なり。只今但馬屋一家を召寄する。事の詮義濟むまでの命を生んと思はぬか、狼狽者」と力を付、二人が口に氣付を入、様々看病なし給へば、お夏は少し息出る。清十郎は心配の臟腑を破りし長烟管、頼む方なく見へにける。程なく、警但馬屋九左衛門、手代勘十郎、一家残らずお召によつて参りたり」とぞ訴ふる。斯る處へ老たる百性、慌しく狼狽來て、一目見るより、耳南無三寶しなしたり。待てむざくと一人は殺さぬ、敵を取てとらせふ」と、せき來る涙を拭ひ、謹んで、「我らは清十郎が親、和泉の國水間の佐治右衛門、年寄ながら面目なや。其勘十郎奴にたらされ、お主を大事、子が可愛さ、よしない手形、なんほう後悔仕る。それに付其時分、娘子共が道頓堀にて取違へ歸りたる笠を、此比取出せば、頂の下に此文有、御詮義なされ、清十郎が科を輕め下され」と、涙を流して訴訟する。役人それく是へ」と、取上て披見ある。又旬幸便に任せ一筆啓上せしめ候。此度お夏嫁入道具の代金百

お下り一大阪より姫路に戻る

四拾兩の内百廿一兩、爰元にて鹽問屋へ相渡し、貴様の損銀残らず相濟し、則請取手形  
殘金十九兩上し申候。追付御下り待入候。但馬屋勘十郎殿參る。同源十郎「殺人何と此  
手蹟相違なしや」と仰せける。九左衛門一見して、「相果し源十郎が筆、判形ともに疑ひ  
なし。サア返答あるか勘十郎、御前にて申せく」と責付れば、勘十郎少しも怯まず、  
「尤我ら私商、損金の立用に道具の代金、暫く取換置たれ共、追付右の金は才覺し  
て、道具屋へ濟し置く。商賣の習ひ、廻り金の無き時は、氣轉を利せ、表裏をつかひ、  
主人の金を手前へ加へ、自分の銀を主の銀に廻し、間に合するは世間共に手代の習ひ、  
我等計に限るでなし。彼の清十郎は傍輩を切殺し、金七十兩盜取、是も手代の習ひか。  
エ、殘多い。まさつと早ふ生れたら、熊坂長範か、石川五右衛門が手代にせば、能い給  
分を取らふ物を」と、憎體にこそ申けれ。今を最期の清十郎、眼をくはつとみひらき、「お  
いゝ勘十郎、廣い世界を己が口から、世間手代の習ひとは、願が過て聞憎い。悪い事  
を習ひといはば、主殺し、親殺し、屋燒、強盜、世間の習ひと許そふか、人を殺せば我  
身も死ぬる、此清十郎が七十兩や八十兩の金に換る命でなし。旦那の御恩、お夏様の情  
に捨ふと思ふ身を、己が口一ツにて期當させた其恨み、をのれをたつた一討に仕廻はふ

願一口

わだかまり一中  
途で奪取る

と思ふたに、仕損ふて口惜し。エ、く無念な口を利するなあ。ハツく我ら故にお夏様の自害、御恩の旦那の憎しみも、嘸や増らん情なや。此年までの御面倒、御恩を報ずる事もなく、御苦勞をかくる事、是ぞ黄泉の障りと成。これ親仁様、妹共」と、呼向け顔をじろくと、云度き事の有そうに、目は働らけど息切れに、人脈絶ゆる兩眼より涙計を暇請ひ、親子他人の隔てなく、皆々哀れを催せり。佐治右衛門涙を流し、「申殿様、勘十郎がお主の銀を引負し、我らを騙した慥な證據出るからは、七十兩も彼奴が盗みに極つた。御詮義なされ、清十郎を御助け下され」と、大聲上てぞ申ける。代官職聞給ひ、「尤々不便なれども清十郎は、人を殺せし白狀紛れなき上は、斷罪遁るゝ所なし。又勘十郎が七十兩、盗みしといふには證據なし。然れ共勘十郎、をのれ一旦主人の金子をわだかまり、清十郎親子に無じつを云懸け、迷惑させし不届、もと皆をのれが悪心より事起つて、お夏も自害に及びたり。主殺しとも謂つ可し。急度仕置に行ふべきが、手を出して人も殺さず、盗人に極まる證據なければ、慈悲を以て助け置く。命の代りに髪を剃し出家して、彼等が菩提を弔ふべきか」と仰ける。「ハア、有難し」と勘十郎頭を地に付け三拜し、小刀抜いて髻より、ふツつと切て捨ければ、役人「テ、神妙く、佛弟子

塗らん一罪を破せん

切緋一斬罪人を縛る繩  
廿五歳一廿五著  
隆に寄せたり  
夏衣云々一お夏も尼となりて清の著掃を甲はん  
爲修行に出づと也

と成たれば、譬へ誠の科有ても、彌々命は取難し。此上は汝が行末、彼が後生の爲ぞかし、和睦して恨みを晴させ、往生させよ」と有ければ、勘十郎一念發起して「是清十郎今は我も懺悔せん。彼の七十兩の小判は、此勘十郎坊主が盗んで、源十郎奴に塗らんと思ふ折節、切られしを幸に、其方に負せたり。恨みを晴れて成佛あれ。跡甲はん」といふ所を、役人扱こそ盗人顯はれたり。其奴縛れ一役人承る」と踏付けく腕捻上げ、はや切繩にぞかけてける。役人直に國中引渡した、獄門に切かけよ」と引立れば、妄執も晴れつゝ清き清十郎、臨終顔も菩薩の數、廿五歳の命は消へて、浮名は今に残りける。お夏も共に取付を、宥め伴ひ立歸り、其夏衣墨に染、年忌くの手向草、花の帽子に修行の笠、笠が能く似た阿彌陀笠、彌陀の御國に生れける。